

海外オーケストラシリーズⅢ フィルハーモニア管弦楽団

指揮:エサ=ペッカ・サロネン ヴァイオリン:ヒラリー・ハーン



エサ=ペッカ・サロネンと東京芸術劇場を結ぶもの 輝かしい歴史に縁のオーケストラと共に聴く 「伝統」と「革新」

「巨人」フィナーレの興奮も醒めやらぬまま、新聞の担当記者らと入った居酒屋。乾杯を終えて、ふと気付くと、斜め向こうのテーブルから、誰かがこちらに手を振っている。ほの暗い店内、目を凝らすと、クラリネットのマイケル・コリンズだ。1990年秋、東京芸術劇場の柿落とし公演、ジュゼッペ・シノーポリ指揮フィルハーモニア管弦楽団によるマーラーの交響曲全曲のツィクルス初日の終演後のことである。当時、同管の首席を務めていたコリンズは、仲間たちと演奏会の大成功を祝っていたところだったのだ。

古くは、フルトヴェングラー、カラヤンやクレンペラー、さらにはムーティ、ドホナーニら、巨匠たちとの信頼関係のなかで密度の高い活動を続けて来たフィルハーモニア管は、芸劇とは切っても切れない縁を持つ英国の名門である。劇場の四半世紀の輝かしい歴史の第一ページは、他ならぬこのフィルハーモニア管と共に記された。シリーズの白眉でもあったカンタータ『嘆きの歌』の演奏はライブ収録され、名盤の一つとして、今も内外の愛好家に親しまれている。

さらに遡って、1983年、エサ=ペッカ・サロネンの国際的なキャリアのスタート、「事件」とさえ呼ばれた華々しいデビューが、ロンドンにおけるフィルハーモニアの演奏会への客演で

あったこともまた、広く知られるところだろう。爾来、サロネンは、指揮者として、そして作曲家としても、第一線を走り続けて来た。NHK交響楽団との自作の世界初演、あるいは、前回の来日時、自らの《ヴァイオリン協奏曲》での諏訪内晶子との共演などもまた、記憶に新しい。因に、先頃、彼がフィーチャーされたAppleのテレビCMでこの協奏曲が使われていたことに胸を踊らせたファンも、あるいは少なくなかったのではあるまいか。

とまれ、芸劇にとってもサロネンにとっても、フィルハーモニア管は、各々の歴史の出発点なのである。

加えてプログラムの面からも、これまでに優るとも劣らず、サロネンとその手兵の魅力は、今回も存分に味わえるはずだ。

サロネンが、通り一遍の曲目としてではなく、むしろ、フィルハーモニアとのこれまでの仕事のなかでも最も重要な位置を占めるものとしてベートーヴェンをとらえていることは、ロンドンでの活動に加え、2012年、作曲家の生地、ドイツのポンのベートーヴェン音楽祭において交響曲全曲のツィクルスを行ったことから明らかだ。前回の《第7番》やアンネスとのピアノ協奏曲などに続き、今回、彼が選んだのは、《第3番》「英雄」。この変ホ長調交響曲は、言うまでもなく、19世紀初頭、音楽

の歴史にロマン派の時代の幕開けを高らかに告げた名曲、時代の最先端を疾走し続けた作曲家の革新の音楽である。

一方、同じロマン派も後期、今一度、古典主義との結節点を見つめ直そうとしたブラームスの《ヴァイオリン協奏曲》で独奏を務めるのは、ヒラリー・ハーン。昨シーズンのネルソンスとの見事な共演でも、芸劇の聴衆にはお馴染みの若きトップ・アーティストである。古典でも新作の委嘱初演でも、細部に至るまでの徹底的なこだわりを持ちながら独自の道を歩み続ける彼女とサロネンとの相性の良さは、シベリウスとシェーンベルクを組み合わせたディスクでも既に実証済みだ。

そして、芸劇で再びフィルハーモニアを聴く喜びについては、改めて言うまでもない。前述のコリンズや、あるいは、作曲家としても知られるヴァイオリンのJ・ミローンなど、このオケには、かねてから、幅広い活動を展開する才人も多い。知られざる名曲から同時代音楽、そして映画音楽などまで、コンサートはもとより、オペラ公演やレコーディングに至るまで、常に変わらない彼らのエネルギーと柔軟性は、何より、個々の楽員たちの「音楽力」の高さがあってこそそのものだ。

前回、改修後のホールの響きに目を輝かせていたサロネンの手兵との再訪は、春の音楽シーンの一番の話題となるだろう。

文:岡部真一郎(明治学院大学教授・音楽学)



3月7日(土) 14:00開演
コンサートホール

指揮:エサ=ペッカ・サロネン
ヴァイオリン:ヒラリー・ハーン
管弦楽:フィルハーモニア管弦楽団

シベリウス/交響詩「トゥオネラの白鳥」
ブラームス/ヴァイオリン協奏曲 二長調
ベートーヴェン/交響曲第3番 変ホ長調「英雄」

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)

詳細はP15へ

クラシカル・プレイヤーズ東京

指揮:有田正広 ヴァイオリン:豊嶋泰嗣



Interview 指揮者 有田正広

《運命》の鍵は数字の「3」が握っている!

クラシカル・プレイヤーズ東京が贈るバレンタイン・デー・コンサート。
親密さに、スパイスを加えたプログラムで、ひと味違った古典派音楽を披露する。

新リーダーと紡ぐ親密な協奏曲

—2014年6月の演奏会から豊嶋泰嗣をソロ・コンサート・マスターに迎えた。

豊嶋さんはベテランの音楽家で、リーダーとして色々なオーケストラを引っ張っています。とても経験豊富です。このあいだも、最初のリハーサルでメンバー一同、彼の大きな存在感に驚いたんです。指揮者とのコンタクトの中から、オーケストラに必要なことをしっかりと伝えてくれる。その示し方もまたすごい。メンバーがそこにぐっと引き寄せられるのが分かります。それでいて豊嶋さんはつねに、指揮者である僕を見ている。僕の意図が、豊嶋さんを通じてオーケストラ全体に伝播していく様子が、ありありと見えました。

—今回、豊嶋はソリストとして参加する。

《レオノーレ》序曲のあと、前半のメインとしてモーツァルトのヴァイオリン協奏曲《トルコ風》を弾いてもらいます。豊嶋さんの音楽には、声高でない、静かで優しい彼の人柄が、そのまま出ています。《トルコ風》はオペラチックと言ってよいほど饒舌な作品ではあるけれど、

豊嶋さんは語りすぎたりしません。モーツァルトのおしゃべりを的確に示してくれます。

協奏曲では何度目かの共演です。以前、違うオーケストラの公演で同じ舞台上に立ったとき、豊嶋さんの本番での演奏はリハーサルで作り上げた以上の、よりファンタジー豊かな表現で、特に弱音での美しい緊張感に、オーケストラ全体が一体感溢れる演奏になったことを思い出します。名手とは、ここまでも雰囲気を一瞬に変えられる何かを持っているんですね。今回もそんな親密さに期待しています。

ノックか鳥のさえずりか?

—演奏会の後半にはベートーヴェンの交響曲第5番《運命》が控えている。

クラシカル・プレイヤーズで《運命》を演奏するのは初めてです。ベートーヴェンの身の回りの世話をしていたシンドラーという人が喧伝した、『運命は扉を叩く』という伝説的な言葉がありますよね。インパクトはありますが、ベートーヴェンはそんな風感じていなかったのではないかな。鳥のさえず

りにヒントを得たという話もありますし。ピピピ・ピーとね。冒頭を超フェルマータするような演奏は、シンドラーの言葉に依るのかもかもしれません。

—この曲を『運命』と呼ぶには、別の視点が必要だという。

ベートーヴェンが「3」にこだわったのは確かだと思います。ハ短調はフラット3つの調です。トロンボーン3本も象徴的ですよ。教会の楽器ですから。フランス革命にシンパシーを感じていたベートーヴェンにとって、自由・平等・博愛を示す「3」という数字は重要でした。同じくフラット3つの交響曲第3番《英雄》に、当時としては異例のホルン3本態勢で臨んだのも、そんな姿勢の表れですね。

《運命》で新たにオーケストラに加わったトロンボーンやコントラファゴット、ピッコロは、第9交響曲の楽器編成にも受け継がれます。《英雄》から続く「3」へのこだわりと交響曲の革新。それが第5を経由して最後の第9にまで至る。そんなところにこそ、交響曲第5番を、ベートーヴェンの《運命》と呼ぶにふさわしい流れがあるのではないかなあ。

取材・構成:澤谷夏樹



2月14日(土) 15:00開演
コンサートホール

指揮:有田正広
ヴァイオリン:豊嶋泰嗣
管弦楽:クラシカル・プレイヤーズ東京

ベートーヴェン/「レオノーレ」序曲第3番op.72b
モーツァルト/ヴァイオリン協奏曲第5番
「トルコ風」イ長調K.219
ベートーヴェン/交響曲第5番「運命」
ハ短調op.67

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
助成:平成26年度 文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

詳細はP13へ